

**入善町じょうべのま遺跡
予備調査概要(6)**

1983年3月

入善町教育委員会

発刊にあたって

昭和54年5月14日に国の史跡指定を受けた「じょうべのま遺跡」については、地主各位のご理解を得て、昭和56年に指定地全域の公有化に成功いたしました。

また、昭和45年6月から数次にわたる発掘調査を実施させていただき、極めて貴重な遺構群を発見できました。今後は、文化庁、奈良国立文化財研究所、県文化課、県埋蔵文化財センター並びに町内外に亘る学識者グループの絶大なご指導とご協力を得て、遺跡の環境整備に手を染めたいと思います。

コンピューターの発達した今日においても、発掘調査のベースとなるものは、地道な手作業であり、永年に亘り蓄積した調査担当者の技術と情熱の結集であります。そして、有能な人材を多く確保することが文化財保護のため、焦眉の急となっております。

今回は、建設省護岸工事の実施予定地につき試掘調査した成果の概報をまとめました。調査期間中、ご苦労をおかけした皆さまに、心から感謝申し上げて、ご挨拶といたします。

富山県入善町教育委員会

教育長 森 栄

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の概要	
1. 調査の経緯	5
2. 調査の概要	5
III まとめ	6
参考文献	6
写真図版	7
挿 図	
第1図 遺跡の位置	1
第2図 地形図	2
第3図 発掘区配図	3
第4図 遺構分布図	3

例 言

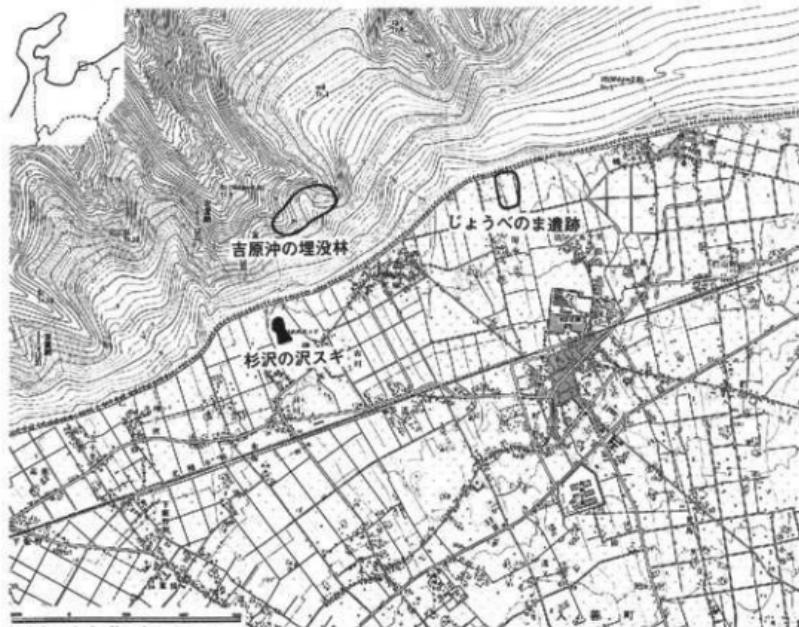
1. 本書は、建設省海岸保全事業補助工事に伴うじょうべのま遺跡第7次調査の概報である。
2. 調査は、建設省北陸地方建設局の委託をうけ、入善町教育委員会が、昭和57年9月27日から10月19日まで実施した。
3. 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣をうけた。なお調査参加者は以下のとおりである。
富山県埋蔵文化財センター狩野勝・松島吉信(以上調査担当者)、田中久栄・田中テル子・田中静子、田中正子・島明子・住久よしま・前田信子・舟川のぶ、飛田みつゑ・中瀬千代子・田中ふじえ・室メイ・上野スミ・舟川かほる・鈴木タカ子・松波花子・田中みづえ・北尾真雅子・竹島ハナ(以上地元作業員)・萩原明子(トレース)。
4. 調査事務局は入善町教育委員会におき、庶務は課員の協力を得て社会教育課主査柳沢一郎が担当し、社会教育課長永原広由が統括した。
5. 調査と概要の作成にあたっては、じょうべのま遺跡整備計画策定委員会の各氏から指導・助言をいただいた。委員は下記のとおりである。また、田中久栄氏には連絡所及び飲料水の提供を受けた。記して感謝いたしたい。
狩野久、田中哲雄、北村文治、瀧城、古間英明、舟崎久雄、奥田淳爾、田中久栄、右井正雄、舟原金与志、森栄、松島吉信
6. 本書の演説図作成および編集、執筆は、富山県埋蔵文化財センター所員の協力を得て松島が行い、遺物写真は橋本正春が担当した。

I 遺跡の位置と環境

北アルプスに源を発し、深く鋭い峡谷を刻んで北流する黒部川は、その下流において、みごとな扇状地を形成する。この黒部川扇状地は、地誌・地形学を始めとして、多方面に研究題材を提供しており、戦前から数多くの研究がなされている。昭和51年3月には、多角的視野から調査研究を進める目的で、黒部川扇状地地域社会研究所が設置され、活発な研究活動が行われている。

黒部川扇状地の形成に関しては、深井氏の研究があげられる〔深井1977〕。それによれば、洪積世中期以前の地形は、現在の棚山と十二貫野台地に残存しており、その後、舟見野扇状地及び浦山複合扇状地が形成されるが、その時期は、洪積世後期から沖積世初期までである。黒部新扇状地と呼ばれる現在の地形は、この後形成される。事実、舟見野扇状地と新扇状地は、明瞭な段丘によって区別される。さらに、舟見野扇状地上には、風野・愛本新・坪野・中沢・下山新等の繩文時代中期から晩期に至る遺跡が分布しており、前述の形成年代を裏づけている。

新扇状地上には、古代以降の遺跡が点在している。じょうべのま遺跡の他に、若菜城跡（黒部市若菜）、HG34（入善町一宿）、富士塚（入善町小杉）、西蓮寺（入善町入膳）などの遺跡が確認さ



第1図 遺跡の位置

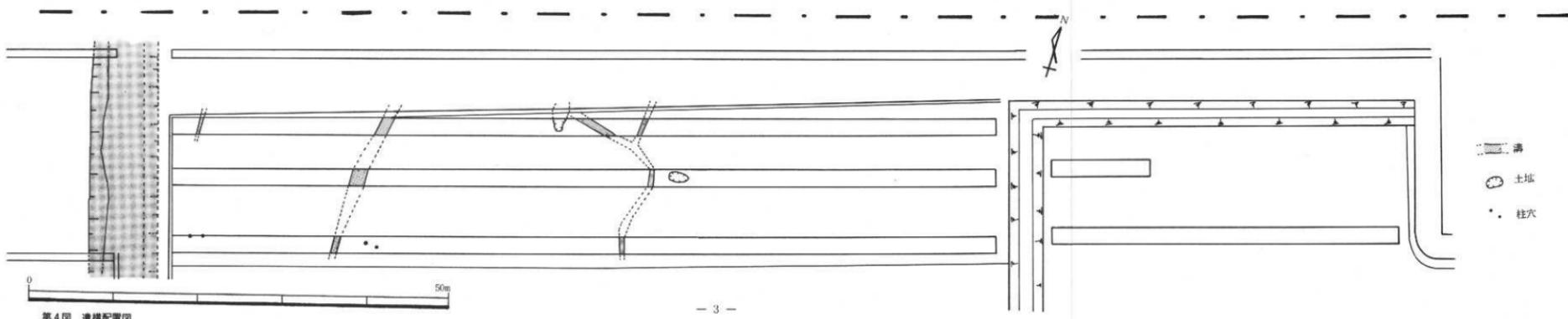
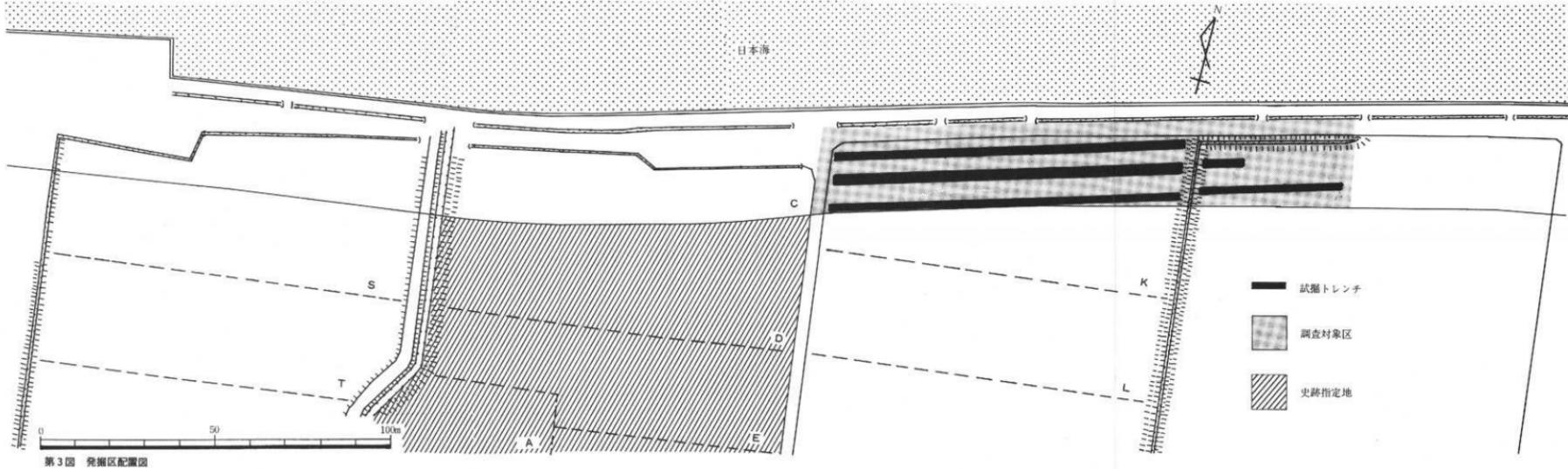
れているが、遺跡の数は比較的少ない。これは、黒部川扇状地が、黒部川の氾濫原であり、絶えず流路が変化していたことに原因があると考えられる。

じょうべのま遺跡が位置する東部海岸地帯は、海岸浸食が著しい。最近の研究によれば【山田・谷井・竹村1978】、1850年から1976年までの126年間に、70~250mもの浸食が報告されている。さらに、入善町吉原沖500mの地点で、約1万年前の沈水林が発見された。これらの事実は、古代・中世におけるじょうべのま遺跡一帯の海岸線や自然景観の復原に、重要な手掛りとなろう。

巨視的に見ると、じょうべのま遺跡は、黒部川扇状地の扇端部に立地していると言えよう。しかし、詳細に現地の微地形をたどってみると(第2図)、ほ場整備実施前、この遺跡の北側はスギ沢で、過去において、そこが黒部川の一支部と考えられる旧河床であったことがわかる。その川が、ある時期にA・B地区の東西に分流したが、中州の微高地に形成されたじょうべのま遺跡は、氾濫の被害を受けることなく、現在に至ったのであろう。



第2図 地形図



II 調査の概要

1. 調査の経緯

じょうべのま遺跡は、昭和16年に企画された郷土史の編さん事業が引き金となり、その存在が知られるようになった。遺跡発見当初の様子は、長年、当遺跡の保存に尽力されている田中久栄氏が執筆された『じょうべのま雑記』〔田中1982〕に詳しく記されている。

昭和45年からは、ほ場整備計画が契機となり、発掘調査が実施されている。49年度まで5次にわたり、遺跡中央部を中心とした調査が行なわれている。その成果をうけて、45年12月に、A・B地区が県指定に、54年5月には、A～H地区が国指定の史跡として保存され、現在に至っている。

また、52年からは、建設省による副堤建設を契機として、発掘調査が実施されている。56年に実施されたC地区では、鎌倉時代前半の掘立柱建物や旧河川が検出されている〔岸本・山本1982〕。今回の予備調査は、K地区及びK地区東側の約3,800m²を対象として行なった。

2. 調査の概要

K地区では、東西の方向に幅2m、長さ約100mのトレンチを3本設定した。また、K地区東側の水田では、東西の方向に幅2mで、長さ約42mと約12mの計2本のトレンチを設定した。

K地区では、耕作土である表土をとり除くと、ほ場整備による盛土があり、その厚さは30～50cmである。さらにこの盛土の下に、厚さ10～15cmの黒褐色土が存在する。これは遺物包含層であり、調査対象区の北側で厚く、南側で薄い堆積状況を示していた。地山面は黄褐色砂質土で、この面で遺構の検出を行なった。

出土遺物は、平安時代前期のもの、鎌倉時代に属するもの、近世に属するものに分けることができるが、その大部分は、中世の陶・磁・土器類である。

平安時代の遺物には、須恵器・土師器・黒色土器がある。須恵器は、杯・杯蓋・壺・甕の器種が確認できる。杯蓋は、復原できるもので口径約12cmをはかる。ヘラケズリされた頂部に小さなつまみがつく。壺・甕は、大部分が胴部の小片のみで、全形を復原できるものはない。土師器は、杯・甕の器種が確認できる。甕は、ゆるく外反し、肥厚した口縁部をもつものがある。黒色土器は杯で、底部に糸切り痕を残す。

中世の遺物には、珠洲・青磁・白磁・青白磁・土師質小皿がある。珠洲は、甕・壺・鉢の器種がある。甕の口縁部で、肥厚せずに強く外反するものがある。鉢の口縁部は直立し、内面には、間隔をおいて卸し目が施されている。青磁と白磁はいずれも小片であるが、碗もしくは皿の形態をとると考えられる。過去の調査で、龍泉窯系と同安窯系の青磁が確認されており、今回の出土品も同じ窯の製品と考えられる。青白磁は合子であり、花弁が体部外面をめぐらしている。

近世の遺物には、瀬戸・越中瀬戸がある。越中瀬戸は大部分が小皿で、天目釉と黄緑釉に分けることができる。体部内面に印花文を施したものもある。

また、56年度の調査の際、製塩土器が出土したが、今回の調査でも数点出土している。ただ細片のため、全形を伺い知ることはできない。

検出した遺構には、溝・土塹・柱穴がある(第4図)。溝は、北から南に向かうものを三本確認した。最も東側の溝は途中で分流し、二本の溝となっている。幅は50~150cmである。土塹は二基で、調査区のほぼ中央で検出した。直径約100cmの大きさである。柱穴群は、調査区の南西隅に分布していた。また、56年度にC地区を調査した際に、東端で南北に走る大溝を検出しており、その右岸は、C地区とK地区の間を走る農道であると考えられる。

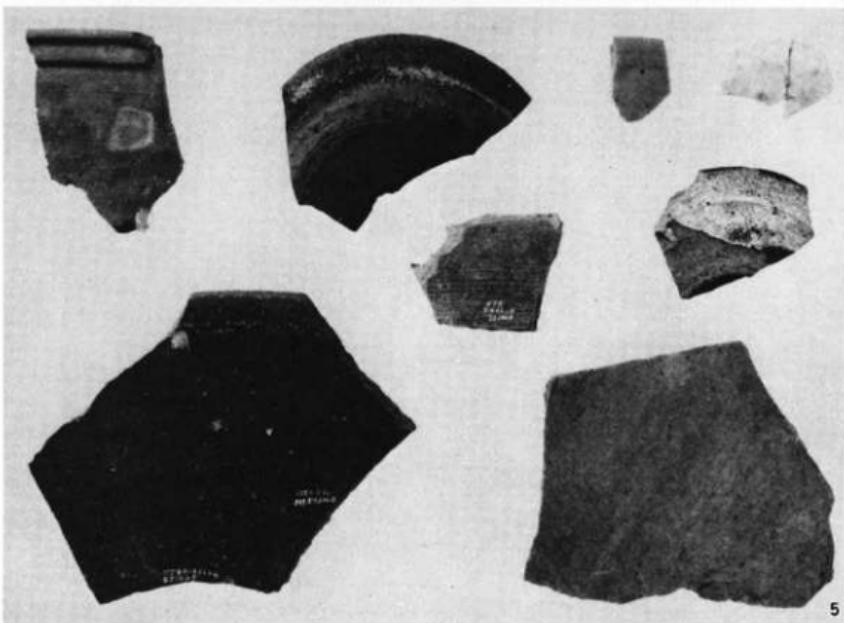
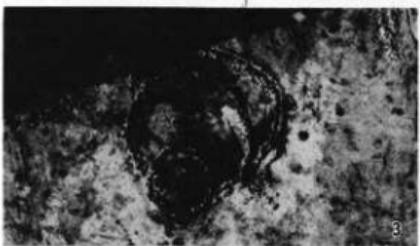
K地区東側の水出では、耕作土の下に盛土があり、茶褐色土へと続いている。さらに掘り下げて地表面をだしたが、遺構は存在せず、東側に向かうにつれて、傾斜した谷部となっていた。また遺物の出土もみられなかった。

IIIまとめ

1. 今回の予備調査で、じょうべのま遺跡はK地区まで広がり、それより東側の水田には広がっていないことを確認した。
2. K地区で、平安時代から近世に至るまでの遺物が出土した。その大部分は中世の遺物であり、珠洲の特徴から、鎌倉時代前半に位置づけられる。
3. 検出した遺構は、溝・土塹・柱穴群である。隣接するC地区・L地区では、鎌倉時代前半の遺構が検出されており、密接な関係が考えられる。

引用・参考文献

- キ 岸本雅敏 1978 「じょうべのま遺跡」『昭和52年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会
岸本雅敏 1979 「じょうべのま遺跡」『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会
岸本雅敏・山本正敏 1982 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」入善町教育委員会
ジ 神保孝造・奥村吉信 1981 「入善町じょうべのま遺跡予備調査概要(4)」入善町教育委員会
タ 竹内俊一 1971 「じょうべのま」入善町教育委員会
高島忠平・岡本東三・舟崎久雄 1972 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報」富山県教育委員会
高島忠平・橋本 正・舟崎久雄 1973 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(12)」富山県教育委員会・入善町教育委員会
高島忠平・橋本 正・舟崎久雄 1974 「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 一人善町じょうべのま遺跡」富山県教育委員会
田中久栄 1982 「じょうべのま雑記」『黒部川扇状地第6号』黒部川扇状地地域社会研究所
ナ 中山正民 1981 「扇状地形論考」『黒部川扇状地第5号』黒部川扇状地地域社会研究所
中谷良一他 1982 「御山天神遺跡」兵庫県龍野市教育委員会
ハ 橋本 正・岸本雅敏 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」入善町教育委員会
フ 深井三郎 1977 「黒部川扇状地の地形と杉沢の成立」『黒部川扇状地創刊号』黒部川扇状地地域社会研究所
ヤ 山田時夫・谷井文夫・竹村利夫 1978 「黒部川扇状地における海岸侵食」『黒部川扇状地第2号』黒部川扇状地地域社会研究所
ヨ 吉岡康暢 1976 「加賀・珠洲」『日本陶磁全集7』中央公論社
吉岡康暢 1981 「珠洲」『日本やきもの集成4』平凡社



1. 全景 2. 作業風景 3. 柱穴 4. 溝 5. 出土遺物

入善町じょうべのま遺跡

予備調査概要(6)

発行日 昭和 58 年 3 月
発行者 入善町教育委員会
編集者 富山県埋蔵文化財センター
印刷所 (株)日本海印刷